

NEWS LETTER



大阪大学全学教育推進機構ニュースレター NO.1

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16

大阪大学全学教育推進機構 広報委員会

E-mail : pr-committee@celas.osaka-u.ac.jp



巻頭言

全学教育推進機構長 総長参与 佐藤 宏介



大阪大学憲章は、「地域に生き世界に伸びる」ことをモットーとして、教育研究の両面において、懐徳堂・適塾以来の自由で闊達な市民的性格と批判精神やその市民性を継承発展させ、自主独立の気概から、次代の社会を支え、人類の理想の実現をはかる有能な人材を社会に輩出することを宣言しています。歴史の大きな転換点を迎つつある今日、日本の青年が諸外国の青年に伍して力を発揮していくためには、専門的知識はもちろんのこと、しっかりした世界の認識と幅広い教養、他者と積極的に交流する力が必須となっています。全学教育推進機構は、大阪大学においてこの広義の教養教育、全学教育、横断型教育を統括し、学生の主体的な学びと教員の教育活動を支援しています。

全学教育推進機構は、大阪大学の全学を対象とした教育プログラムを企画・運営する組織です。学ぶ姿勢を身に付け、国際性豊かな教養と専門への基礎をはぐくむ低学年向けの科目から、分野の壁を超えて視野を広げる高学年・大学院生向けの横断型教育まで、多様な教育プログラムを企画・運営しています。本機構の第一のミッションは全学教育企画開発部が担います。大学教育の実践的な研究を行い、大学教育の質の向上及び社会に求められる人材を育成する機能の強化を図ります。第二のミッションは共通教育実施推進部が担い、大阪大学全学の教員によって、教育プログラムが実施されます。第三のミッションは教育学習支援部が担います。学生の主体的な学びへの支援、ならびにその責任をもつ教員への教育上の支援を行っています。

しかしながら、我ら全学教育推進機構の諸活動が、キャンパスが三つに分散していることもあり、全学に余り周知されていなかったのではないかと反省しています。本機構の前身となる大学教育実践センターが、「共通教育だより」を定期発行して学内広報をしてきたことはご記憶に残っていることと思います。そこでこの度、全学教育推進機構として初の広報誌「全学教育推進機構ニュースレター」を年2回刊で発行し、皆様にお届けすることとしました。全学挙げての教育改革を進めている折、ご一読いただけましたら、幸いと存じます。

サイエンス・コモンズ オープン!! Science Commons

機構 Topics

2016年9月末、全学教育実験棟1階を中心とした部分に「サイエンス・コモンズ」が完成しました。「学部学生の研究マインドを醸成する自主協働研究環境整備」が文部科学省に認められたためです。「サイエンス・コモンズ」は、カジュアルな議論の空間「ステューデント・コモンズ」に隣接し、豊中キャンパスのメインストリートに接する南側と中庭に接する西側がデッキテラスで繋がっています。「サイエンス・コモンズ」の完成で、全学教育の総合棟、実験棟の1階のほぼ全部が、学生の皆さん共有の空間となりました。

「サイエンス・コモンズ」1階には、イベントに使える Science Studio A、自主学習・研究に使える Science Studio B、高度実験機器も設置され科学実験を身近に感じられる Science Analysis Lab、Science Lab A、Bが、また、3階には、オープンな実験スペース MultiLab、MultiLab Mini があります。Science Studio A、Science Studio B はイベントがないときは自由空間カルチエ (Quartier) として利用できます。

昨年11月8日に行われたオープニング・セレモニーでは、文学研究科長の金水敏先生と理学研究科の橋本幸士先生による対談「異次元対決 文 vs. 理」が行われ、「重力」をテーマに熱い戦いが繰り広げられました。まさに、分野の垣根を超えてサイエンスに親しむ空間の門出に相応しい催しでした。

Science Studio A はメインストリートに面していることもあり、大阪大学の研究成果を発表する記者会見など様々なイベントに使われています。

また、Science Studio B の特徴は、何と言っても部屋の約4分の1の部分に、畳が敷かれていることでしょうか。学習や議論をしている横で、畳の上でのんびり身体を休めている学生さんもいます。今年1月20日には、この畳のスペースで、上方舞・山村流師範である山村若静紀さんの「上方舞とトークの夕べ」も行われました。

Science Studio A、B は、通常の授業には使用できませんが、授業の中間発表会などには使えます。Science Studio A、B 以外にも「ステューデント・コモンズ」「サイエンス・コモンズ」には、イベントやセミナーに使える様々なスペースがあります。詳しくは、全学教育推進機構のホームページをご覧ください。また、「ステューデント・コモンズ」内にあるスタッフ・ルーム (06-6850-6148) までお問い合わせください。

「サイエンス」と一口に言っても様々な分野があります。これからもこの空間でサイエンスを身近に感じ、分野を超えた交流が広がっていくことを期待しています。皆さんもぜひ、「サイエンス・コモンズ」をご活用ください。



Science Studio A



Science Studio B



(サイエンス・コモンズ活用委員会)

機構 Topics

全ての阪大生に最高の授業を～ 2016年度 教育学習支援部の活動報告～

教育学習支援部は、2016年4月に、旧教育学習支援センターと旧教育学習支援部門が統合されて発足しました。私達のミッションは、学生の主体性を重視する教育を正課と正課外の学びのスパイラルとして捉え、教育の高度化を全学で展開することです。

具体的な活動としては、大学教員に対する教育支援を行っています。「アクティブラーニング入門」や「英語で教える授業」など多種多様なFDセミナー、ワークショップを毎月開催し、大阪大学の教員の皆様が抱えるお悩みやご希望に応じた最適なプログラムを提供しています。またICT教育に慣れ親しんで頂くためにどなたでもご参加いただける「iPad Café」を毎月開催しています。

2016年度は前期・後期合わせて約60回のFDセミナーを開催し、参加人数は500名を超えています。これらのセミナーは関西地区FD連絡協議会とも共催しており、本学だけではなく他大学の先生方にも無料でご参加頂き大変好評です。

さらに授業、研究室教育、論文指導などに関して個別のコンサルティングサービスも提供しています。

毎年9月に全学FD委員会が開催している「大阪大学ファカルティ・ディベロップメント(FD)フォーラム」には、企画・実施段階において当部が積極的に関与しています。今年度はテーマを「大阪大学における大学院教育の未来を考える」と題し、教育学習支援部のスタッフが約10の研修を担当いたしました。吹田キャンパスでは86名、豊中キャンパスでは81名の教員の皆様が参加され盛会となりました。

こうした活動の中から、今回特にご紹介したい人気のFDセミナーは佐藤浩章准教授の「モチベーション理論を授業に取り入れる」です。学生の学習意欲を上手にマネジメントすることは教育者の腕の見せ所です。セミナーでは12のモチベーション理論を紹介し、その理論を自分の授業にどう活かすかを参加者各自が考えました。セミナー後、参加者の方からは以下の感想を頂きました。



*FDセミナーの様子 2016年12月6日 コンベンションセンター



- ・これまでモヤモヤと考えていたモチベーションのあり方について、ずいぶんとすっきりした理解ができるようになりました。
- ・FDセミナーではいつも新たな発見、気づきがあります。本当にありがとうございました。
- 一方、上記のような意見だけでなく、改善点についてもご指摘いただいています。
- ・もっと事例を紹介してほしい。
- ・セミナー時間を長くしてほしい。
- ・大人数クラスではどうすれば良いのか？

改善点については、スタッフ間で共有し、次のセミナーをよりよいものにするための参考にさせていただきます。

当部が提供するセミナー等にまだ参加されていない教職員の皆さんは、是非とも一度ご参加ください。また、同僚や他大学の知り合いの先生をお誘いの上での参加も大歓迎です。また、こんなFDセミナーがあったらいいな、この問題はどうか解決すればいいのか、などご希望やお困りの事があれば、遠慮なくメールをお送りください。当部のウェブサイトにもセミナー関連の情報が掲載されていますので一度ご覧ください。

(教育学習支援部)

教育学習支援部ウェブサイト：<http://www.tlsc.osaka-u.ac.jp/>

教育学習支援部問い合わせ用メールアドレス：tlsc@celas.osaka-u.ac.jp

春！スムーズなスタートを！ ～履修支援の取り組み～

春、希望に胸を膨らませキャンパスを歩く新入生。今年も約3500名が大阪大学の仲間に加わりました。

新入生がスムーズに大学生としての学習を始められるよう、全学教育推進機構では、履修手続きのサポートを行っています。新入生は、入学式の翌日には、基礎セミナー履修希望届、健康・スポーツ教育科目コース選択希望届を提出し、その後は、KOANでの履修選択希望登録と、しなければいけないことがたくさんあります。

初めてのことに戸惑いも多いと思いますので、チューデントスタッフ(先輩学生)の協力も得て新入生の質問などに対応しています。

入学関係資料は3月中旬に新入生に送られていますので、入学式前にも履修登録の準備はできますが、資料の量は多岐にわたり読むだけでもたいへんです。そのためホームページに「新入生のための履修支援サイト」を開設し、カリキュラムの内容や4月からの履修手続きの流れなどを分かり易く解説しています。新入生の疑問や不安の解消に役立てばと願っています。

新入生の履修手続き以外にも、他大学で取得した単位の認定手続きや再履修学生への対応など、教務系の春は大忙しです。各学部所属している学生の皆さんですが、大阪大学での最初の日々は、全員豊中キャンパスでの共通教育で始まります。実り多い大学生活に繋がるよう、これからも学内各部署と連携し、履修についてのサポートを充実させたいと思います。

(教務係)

全学教育推進機構ウェブサイト 新入生向けページ
<http://www.celas.osaka-u.ac.jp/fresher/>



ファカルティラウンジがオープン！



2016年10月、全学教育推進機構の講義棟2階の教務係の東隣(図1)に、ファカルティラウンジ(Faculty Lounge for Office Hour、FLOH(フロー))がオープンいたしました。

大阪大学全学部学生が受講する必要がある全学共通教育科目は、主に豊中キャンパス全学教育推進機構で開講されています。全学共通教育科目は、学内の常勤教員、学外の非常勤教員によって担当されています。

大半の教員は全学教育推進機構内には研究室がないため、学生の個別の質問に対応するためのオフィスアワーを実施することは、これまで困難でした。そこで、今回、オフィスアワーを実施するための共有スペースとしてファカルティラウンジを設置することとなりました。授業期間の朝8時30分～夕方18時までのあいだ開室しております。

ガラス張りのオープンな雰囲気の中に、ラウンドテーブルが6セット(それぞれイスが3、4脚)あり、緩やかなパーティションで区切られています(図2)。各テーブルにはホワイトボード、電源があり、ファカルティラウンジ専用のインターネット回線もあります。10月～1月の利用実績として、毎月のべ50～90名の利用があり、1日平均3～4名の方々にお使いいただいております。担当授業の学生への個人面談、質問応答といった学習相談のオフィスアワーとしての利用だけでなく、担当授業の前後の待機場所として、他の教員との交流の場として、授業準備やレポート・試験の採点場所としても、ご活用いただいております。そのため、1回の利用時間も10分程度～1時間以上まで幅広いという特徴があります。室内には、教育学習支援部が提供しているFDセミナーの案内ポスターが掲示されており、授業方法を扱った書籍等も揃えております。全学共通教育科目の授業を担当される教員はどなたでも自由にご利用いただけます。是非お立ち寄りいただき、大阪大学の教育活動のためにご活用いただけますようお願いいたします。

(教育学習支援部 ガイダンス室)

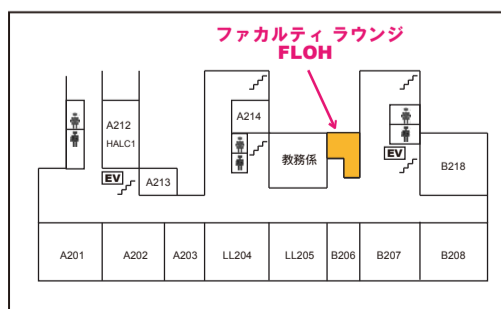


図1 全学教育推進機構 講義棟A棟B棟2階

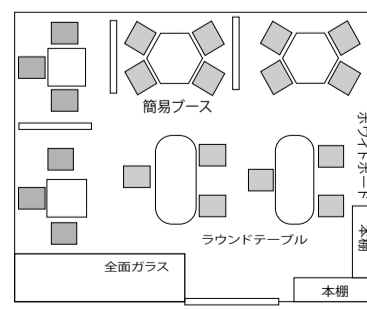


図2 ファカルティラウンジの室内図

機構 Topics

学際融合教育 / 高度教養教育ラウンドテーブルを開催しました

12月12日(月)11時～17時に豊中キャンパス全学教育推進機構サイエンス・コモンズ Science Studio Aにて学際融合教育 / 高度教養教育ラウンドテーブル(主催 横断型教育部門 共催 CO デザインセンター)を開催しました。大阪大学では、大学院生の副専攻的教育制度として副専攻プログラム(H28年度5プログラム)と高度副プログラム(H28年度37プログラム ※一部のプログラムは6年制課程の学部5・6年次含む)を、社会人向けには科目等履修生高度プログラム(H28年度14プログラム)を提供しています。こうした分野を横断したプログラムを学際融合教育プログラムと呼んでいます。また、高度教養プログラムとして知のジムナスティックス(H28年度332科目)を提供しています。このように大阪大学は学際融合教育や高度教養教育に関して豊富なプログラムや科目を提供しています。近年こうした教育の重要性が高まり、主要大学で取り組みがなされていますが、これまで関係者が一堂に集まり情報や知見を共有する場はありませんでした。

今回のラウンドテーブルでは、学際融合教育 / 高度教養教育に先進的に取り組む大学の関係者により各大学の取り組みが発表され、その後ディスカッションを行いました。各大学の取り組みは多様であり、プログラムの進展にも違いがありますが、その一方で、学際融合教育 / 高度教養教育の概念、プログラムの学内での位置づけ、専門教育との関係性など共通の課題が存在することがわかりました。主要大学が知見や課題を共有することで今後の発展の起点とすることができました。参加者総数は19名(学内10名 学外9名)でした。



当日のスピーカー、コメンテーター、ゲストは以下の通りです。

- 【スピーカー】
- | | | |
|-------|---------|--|
| 東北大学 | 羽田貴史教授 | (高度教養教育・学生支援機構 高等教育開発部門長
高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター長) |
| 名古屋大学 | 栗本英和教授 | (教養教育院副院長, 評価企画室副室長) |
| 大阪大学 | 松行輝昌准教授 | (全学教育推進機構 全学教育企画開発部 横断型教育部門) |
| 広島大学 | 小澤孝一郎教授 | (教育企画担当副理事) |
| 九州大学 | 谷口説男教授 | (基幹教育院副院長) |
- 【コメンテーター】
- | | | |
|--------|---------|-------------------------------|
| 東北大学 | 中村教博教授 | (高度教養教育・学生支援機構 学際融合教育推進センター長) |
| 東京工業大学 | 室田真男教授 | (リベラルアーツ研究教育院 副院長) |
| 京都大学 | 中村佳正教授 | (学際融合教育研究推進センター長) |
| 同志社大学 | 菅澤貴之准教授 | (学習支援教育開発センター) |
| 神戸大学 | 米谷淳教授 | (教育推進機構大学教育研究推進室長) |
- 【ゲスト】
- | | | |
|-------|----------|-----------|
| 立命館大学 | 田中伸弥課長補佐 | (教学部大学院課) |
|-------|----------|-----------|
- (全学教育企画開発部 横断型教育部門)

現代キャリアデザイン論 ～複雑化する時代のサバイバル術～

特色ある授業

<概要>

「現代キャリアデザイン論」は大阪大学の教養教育科目におけるキャリア教育の授業です。2014年度に開講され、2017年度で4年目となります。受講希望者は年々倍増しており、2016年度には第一希望と第二希望の合計が660名に達しました。そのため、2017年度からは年2回開講しています。この授業は全ての学部生を対象としているため、学部、学年、国籍などが異なる多様な学生が受講しています。

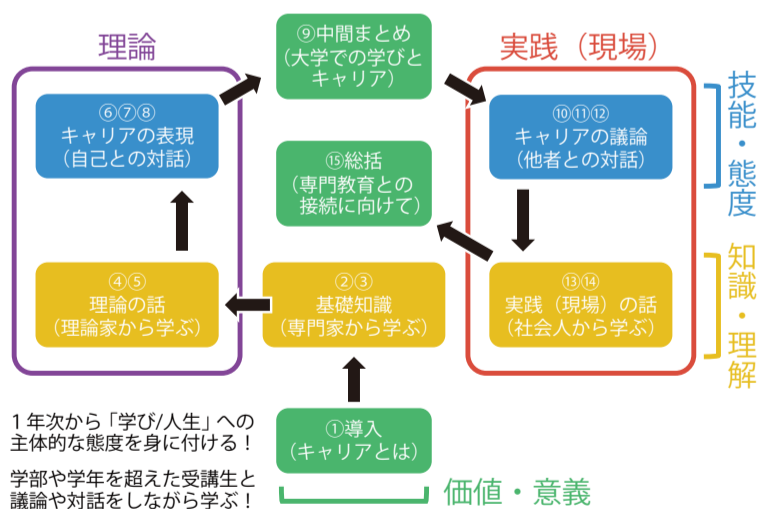
この授業の特徴として、①受講生が多様であること(例年、ほぼ全学部、全学年の学生がいます)、②対話を基本としていること(毎回4人組を作って1分間の自己紹介や前回の授業の復習をしたり、キャリア白熱教室で生き方・働き方について議論したりします)、③理論と実践(現場)の両方からバランス良く学べること(キャリア理論を学んだり、社会人や内定者の先輩の話の聞いたりします)、④インプットとアウトプットのバランスが良いこと(キャリアに関する知識を学んだり、自己物語や人生双六で自分のキャリアを表現したりします)、⑤ICTを活用したアクティブラーニング型の授業であること(ウェブ上で授業の感想を共有したり、クリッカーで他者の意見を把握したりします)、などが挙げられます。

グラフィック・シラバスを見てもらえば分かるように、学部や学年を超えた受講生と議論や対話をしながら、低学年のうちから学びや人生に対する主体的な態度を身に付けることを目的とした授業です。

(教育学習支援部 講師 家島明彦)

科目区分： 共通教育系科目 教養教育科目 先端教養科目
対象： 全学部、全学年
担当： 家島明彦

「現代キャリアデザイン論」グラフィック・シラバス



1年次から「学び/人生」への主体的な態度を身に付ける！
学部や学年を超えた受講生と議論や対話をしながら学ぶ！



～授業風景～

スポーツ庁「体力・運動能力調査」の実施

スポーツ庁(平成27年9月までは文部科学省)の実施する「体力・運動能力調査」は、東京オリンピックが開催された昭和39年以来、半世紀以上にわたり毎年実施されています。この調査の対象は6歳から79歳までの国民であり、これだけ継続的に幅広い年齢層を対象に行われている体力調査は世界でも類を見ません。6歳～19歳の青少年に関しては、昭和39年から50年以上にわたり、握力、50m走、持久走、ハンドボール投げが継続して調査されており、長期的な年次変化の比較が可能になっています。また、平成10年からは新体力テストが開始され、上体起こし、反復横とび、立ち幅とびの年次変化も比較できるようになりました。今年度、スポーツ庁の依頼により大阪大学の健康スポーツ教育科目を受講する1年生を対象に「体力・運動能力調査」を実施しましたので、その結果を報告します。

調査の対象者は、大阪大学の文学部、人間科学部、経済学部、薬学部に所属する18歳および19歳の男女507名でした。大阪大学1年生の握力、上体起こし、反復横とびの結果は、男女ともに全国平均以下でした。とくに女子の上体起こしは全国平均を大幅に下回る結果でした。持久走と50m走の結果も、男女ともに全国平均以下でしたが、とくに19歳男女の持久走は全国平均を大幅に下回る結果でした。これに対して、長座体前屈と立ち幅とびの結果は、男女ともに全国平均以上でした。また、ハンドボール投げの結果は、男子では全国平均以上でしたが、女子では全国平均以下でした。同様に、体力テストの合計点も、男子では全国平均以上でしたが、女子では全国平均以下でした。

このように、大阪大学1年生の体力の特徴として、上体起こし、50m走、持久走といった運動強度の比較的高い種目が全国平均以下であることが明らかになりました。とくに一浪している19歳男女では、この傾向が強く見られました。

体力・運動能力調査における大阪大学と全国平均との比較

区分	年齢	男子						女子					
		全国平均			大阪大学			全国平均			大阪大学		
		N	平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD
握力 (kg)	18	590	42.6	6.4	177	39.9	6.7	536	26.6	4.3	173	25.8	4.4
	19	517	43.2	6.4	93	42.2	7.4	510	27.2	4.9	64	27.0	5.0
上体起こし (回)	18	589	31.7	5.1	177	29.8	6.5	526	24.5	5.2	173	21.8	5.5
	19	521	31.4	5.4	93	30.7	5.4	513	24.0	5.8	64	21.7	6.9
長座体前屈 (cm)	18	592	49.5	10.6	177	52.9	10.4	544	48.7	9.1	173	51.0	10.1
	19	518	50.4	9.8	93	53.1	13.1	515	49.1	9.6	64	53.8	10.7
反復横とび (点)	18	590	59.4	5.8	177	58.1	6.3	545	49.5	5.4	173	48.7	4.9
	19	515	59.6	5.7	93	58.8	5.5	505	48.4	5.4	64	48.2	7.5
持久走 (秒)	18	230	387.7	48.9	177	391.3	44.9	157	310.9	37.1	173	309.7	35.3
	19	155	379.8	43.5	93	389.6	45.2	177	301.7	33.0	64	316.0	42.6
50m走 (秒)	18	1,000	7.32	0.50	177	7.49	0.82	947	9.09	0.81	173	9.20	0.77
	19	743	7.31	0.49	93	7.47	0.63	613	9.03	0.77	64	9.24	0.91
立ち幅とび (cm)	18	1,029	229.2	22.4	177	232.3	21.4	979	168.3	22.9	173	175.4	18.5
	19	765	230.4	23.3	93	239.7	20.5	628	172.1	22.4	64	174.9	23.6
ハンドボール投げ (m)	18	1,038	25.8	5.6	177	26.3	6.8	991	13.9	4.0	173	13.7	4.1
	19	762	25.6	5.8	93	27.2	6.3	609	14.1	3.6	64	13.7	3.9
合計点	18	540	56.0	8.2	177	57.6	10.1	501	52.6	9.6	173	47.3	10.4
	19	461	56.7	8.1	93	59.1	8.6	454	52.0	10.1	64	47.8	11.4

また、アンケート調査の結果から運動部所属の有無、運動・スポーツの実施頻度、1日の運動・スポーツの実施時間と体力テスト項目との間には非常に強い関連性が認められました。これらのことから、今後の大阪大学の体力増進策として、運動部に所属しない学生が正課以外でもスポーツやフィットネスに取り組み、継続できる環境づくりを進めることの重要性があらためて浮き彫りになりました。(全学教育企画開発部 スポーツ・健康教育部門)

教員インタビュー

北沢 美帆 助教

全学教育企画開発部 全学共通教育部門

—教員になって何年目ですか？

2年目です。それ以前は博士課程の学生でした。

—ずっと阪大ですか？

ずっと阪大です。理学部生物科学科からそのまま大学院まで行きました。

—高校生の頃から生物や生命科学をやりたいと思っていたのですか？

高校の頃、タンパク質などの分子がどのように生物の一部として働いているのかに興味があり、分子生物学に強い大阪大学を選びました。大学で学ぶうちにマクロな生物をもっと知りたいと思うようになりました。その頃、後に指導教員となる藤本仰一先生がいらして理論生物学研究室ができ、研究対象はミクロでもマクロでも何でも良いとのことだったのでその研究室に入りました。

—今はどのような科目を教えているのですか？

今年から基礎教養1の「現代生命科学の基礎」と基礎教養2の「生命科学の考え方」という科目を教えています。「現代」の科学とはこれまでの研究の積み重ねですから、歴史的な文脈に重点を置いています。研究をするようになってから、歴史を学ぶことの必要性を感じるようになりました。私は植物の研究をしていますが、100から200年前の文献が参考になることもあります。例えば、ゲートは植物に関する著作で「花は葉の変形である」ということを言っており、現代の生物学によっても支持されています。他にも多くの興味深い観察がなされていますが、その解釈は当時の宗教や時代背景に左右されるため、文献を読むにあたって歴史的な知識が必要になります。そこで、アリストテレスから21世紀に生まれた考えまで、一通り学ぶ講義を計画しました。

—全学教育推進機構の教員として他にどのような仕事をされていますか？

広報委員会とサイエンス・コモンズ関係の仕事です。広報ではウェブサイトの担当をしています。学生向け情報の整備を進め、特に履修に関する情報をわかりやすく提供できるよう、機構の教務係と一緒に検討しています。

—サイエンス・コモンズの方は？

サイエンス・コモンズとは、学生が科学を身近に感じることができるオープンな共有スペースです。昨年10月にはオープニング・イベントとして文学研究科の金水教授と理学研究科の橋本教授の特別対談を企画、実施しました。その後、上方舞の実演イベントにご活用いただくなど、徐々に活用の幅が広がっていると感じます。自然科学に限らず、様々なサイエンスを学生が身近に感じられるスペースにしたいと考えています。

—どのような研究をしているか教えてください。

私は花卉の数がどうやって決まるかについて研究をしています。分野でいうと植物学と数理生物学です。基礎となっているのは葉序、すなわち植物の葉のつき方に関する研究です。世界には様々な植物がありますが、葉序に注目すると数種類のパターンに分類できます。これらのパターンは、多くの植物に共通した単純なルールでつくられると考えられています。私は、先程のゲートにならって、花卉のつき方も葉と同じルールで決まるのではないかと考えました。一方、花卉の数は、サクラは5枚、ナズナは4枚、ユリは3枚など、種ごとにだいたい決まっています。ところが花びらが7枚の植物はほとんどいません。この差がどこから生じるか知るため、数理モデルを用い、葉序の形成ルールを花に応用してシミュレーションを行いました。すると、花卉の数が7というのは不安定だけれど、5や4は安定であることがわかりました。

—研究の面白さはどのあたりにあるのでしょうか？

植物って本当に「適当」なんですよ。かっちり決めなくて良いからこそ、アサガオやバラの花の多様性があります。また、同じ種であっても、ちょっとした環境変化などに応じて形が変わってしまうことがあります。同じ遺伝的情報からいろいろな形をつくりだせるということは、自分で動くことができない植物にとって有利だったのではないのでしょうか。

—植物学は現在どのような状況にあるのでしょうか？

植物学は長い歴史を持つ分野ですが、数十年前からシロイヌナズナをはじめ数種類のモデル植物を用いた研究技術が発達してきました。形態形成のしくみについても、分子レベルでの理解が深まりました。これらのしくみが植物の世界でどの程度広く見られ、祖先的な植物とどのように違うのか、といった研究が今まさに発展しています。その中で、花の形の進化に発生メカニズムが与えた影響を解き明かしたいと考えています。



花器官の数のばらつき。三つの絵はいずれも同じ種(セツボンソウ)の花だが、萼片(白い花弁状の器官)の数が異なる。

今年一年間、はじめて講義形式の授業を一人で持って、知識を体系化し伝えることの難しさと面白さを実感しました。これは現在進めている全学教育推進機構のウェブサイトについても言えることで、どうすればすっきりと整理でき、わかりやすく伝えられるか、日々試行錯誤しています。なお、当機構のウェブサイトでは、コモンズはじめ機構の施設内や全学共通教育科目に関する情報を発信しております。学生の指導や学内の交流促進等に役立てていただければ嬉しく思います。



編集後記



全学教育推進機構ニュースレターは全学教育推進機構の活動をよりよく知って頂くために発行されました。創刊号は巻頭言、機構トピックス、特色ある授業、教員インタビューの4つのコンテンツの構成にしましたがいかがでしたでしょうか？次号以降も機構の活動をお伝えるためにコンテンツを充実させ、このニュースレターを進化させていければと思っていますのでどうぞよろしくお願いいたします。

全学教育推進機構広報委員会